私も『また次の春へ』

弘前大学教育学部附属中学校　三上玲央

私は小学校一年の十二月、一緒に暮らしていた祖父をすい臓ガンで亡くした。まだその時は悲しいけれど実感がわかなかった。母方の祖父なので母は私以上に苦しんでいたのではないか、とは多少考えていた。祖父は私のことを育ててくれているような、父親が二人いる様な感覚さえあった人だ。とてもまめな祖父は、祖母も母も毎日疲れてしまう程の気のつく性格だったから、子である母はよくぼやいていたものだ。孫の私からみても親子というもののリアルな姿を、面白いだの冷や冷やするだのと遠目から感じて、私は母に小一ながら「おつかれさま」と言ったことがあるらしい。これは後々高学年になった頃、祖父の思い出話をしていた時に、母が教えてくれた話だ。我ながら、生意気だった。

その母も自身が中学一年の頃には、父方の祖母を亡くす経験があったと聞いている。私とすっかり同じじゃないか。私はおどろいた。私が祖父に育てられていると感じる程の感覚を、母も子供の頃に感じていたのだった。とても近い存在であったとしみじみ語る母を見ていると、私も私の母も、親にだけではなくとても可愛がられ、幸せな時間を与えてもらったんだと気付く。同時に、幸せで大切な思い出を残してくれたことにも気付いた。写真でもなく動画でもない、心の中に、記憶の中に。

亡くなったのは冬だから、とても寒かったのを今でも覚えている。三才だった私の弟が、斎場で大泣きしたのを覚えている。母が

「じいじにはもう会えなくなってしまうからさみしいけれど、元気に頑張っていこうね。」と話した。三才の子供にむかってそんなにはっきり伝えてしまって良いのか、ちゃんと理解できると思って話しているのだろうか、疑問だった。でも、それを聞いた弟は大泣きしたのだ。きっと分かったんだ、と感じた。私だって泣きたかった。年老いていたって父親のようだった。私の父親は仕事の都合で普段は家にいない。大型連休の時だけ帰ってくる。そのさみしさもあってか、幼いっ

ていいなあ、と感じた日だったことは忘れられない。
その前の年、東日本大震災があった。今だに、テレビで流れる映像やその時を語る番組は、私の心をしめつける。大きな被害のあったところに知り合いがいた訳ではないが、本当の恐怖というものはもっと違っていたことに年々気付かされる。復興に何も役に立っていないし、自分のことで精一杯の自分がいる。家族みんな、まだまだ実感できていないのかも知れないと思うと、申し訳なさもある。ただ実際母はずっと体調がすぐれないと言っていたし、父も仕事が福島だった時には悲しい光景がまだ残っていて心が痛いと言う。自分の中できちんと消化できない悲しみを大人でも子供でも、日本でも世界でもかかえている様に思う。良いことも悪いことも人の心と記憶に残る。それを大切にしていこうと改めて強く思う。でも、すれちがった人はとても悲しい思いをして、今も苦しみ過ごしているかもしれない。手を差し伸べることができない。それがまた、悲しい。
「今から何ができる?」「なりたいものは何?」「将来に何をつなげたい?」「そのための進学先は?」なんてことばかりの毎日だ。勉強量が足りない、課題を終えられない、自分の時間が作れない……とか、不満ばかり。良いことと言えば、どこの何がおいしいとか、友達と遊んで楽しかったとか、この本を読むまで今現在のことばかりを考えていた。春がくるとき、新しい学年、友達、新しい何かにわくわくしたり、不安がったり、自分のことばかり。でも私たちは生きているからこそ色々なことが起こる。その色々なことは、良いことばかりではない。大変なこともたくさんある。それを乗りこえなくてはならない。四季が必ず巡り春が来るから、私は桜がきれいに咲くまで、長い冬をじっとこらえて乗りこえる。『また次の春へ』は、大切な人を亡くし、残された人々のことを伝え、私にこれからどんな春につなげていけば良いのかを心から考えるきっかけをくれた。そして、一日一日を大切に生きよう、知らない誰かのために動ける自分でいよう、と思わせてくれた。今年は祖父の七回忌にあたる。十二月はこれまでの十二月とまた違った気持ちで迎えることができるだろう。